

Title	京大広報 No. 578
Author(s)	
Citation	京大広報 (2003), 578: 1441-1454
Issue Date	2003-04
URL	http://hdl.handle.net/2433/196524
Right	
Type	Others
Textversion	publisher



京大広報

No. 578

2003. 4

目次

大学の動き

機構長の新設.....1442

部局長の交替等.....1442

ウォータールー大学との学术交流.....1446

寸言

連続，非連続 堀場雅夫.....1447

随想

「一般教育」をめぐると思うこと

名誉教授 山口 巖.....1448

洛書

時空と心の距離感 中原 勝.....1449

訃報1450

日誌1453

お知らせ

総合博物館平成15年度春季企画展を開催.....1453

第8回エネルギー理工学研究所

公開講演会「エネルギー研究の最前線と

研究・教育拠点活動」.....1454

編集後記1454



京都大学広報委員会

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

大学の動き

機構長の新設

高等教育研究開発推進機構長

高等教育研究開発推進機構の新設に伴い、赤岡 功経済学研究科教授（組織経営分析専攻経営・社会環境分析講座担当（経営学原理））が、4月1日付けで同機構長に委嘱された。任期は平成17年3月31日まで。



部局長の交替等

（新任）

教育学研究科長・教育学部長

東山紘久教育学研究科附属臨床教育実践研究センター教授（臨床心理実践学講座担当（心理臨床学））が、皇 紀夫教育学研究科長・教育学部長の任期満了に伴う後任として、4月1日付けで任命された。任期は平成17年3月31日まで。



法学研究科長・法学部長

吉岡一男法学研究科教授（民刑事法専攻刑事法講座担当（刑事学））が、木村雅昭法学研究科長・法学部長の任期満了に伴う後任として、4月1日付けで任命された。任期は平成17年3月31日まで。



理学研究科長・理学部長

笹尾 登理学研究科教授（物理学・宇宙物理学専攻粒子物理学講座担当（高エネルギー素粒子物理学））が、加藤重樹理学研究科長・理学部長の任期満了に伴う後任として、4月1日付けで任命された。任期は平成17年3月31日まで。



農学研究科長・農学部長

高橋 強農学研究科教授（地球環境科学専攻地域環境管理工学講座担当（農村計画学））が、松野隆一農学研究科長・農学部長の任期満了に伴う後任として、4月1日付けで任命された。任期は平成17年3月31日まで。



情報学研究科長

上林彌彦情報学研究科教授（社会情報学専攻社会情報モデル講座担当（情報工学））が、茨木俊秀情報学研究科長の任期満了に伴う後任として、4月1日付けで任命された。任期は平成17年3月31日まで。



生命科学研究科長

稲葉カヨ生命科学研究科教授（高次生命科学専攻体制統御学講座担当（免疫学））が、柳田充弘生命科学研究科長の任期満了に伴う後任として、4月1日付けで任命された。任期は平成17年3月31日まで。



地球環境学堂長・地球環境学舎長

中原紘之地球環境学堂教授（資源循環学廊（沿岸域生態系保全論））が、内藤正明地球環境学堂長・地球環境学舎長の任期満了に伴う後任として、4月1日付けで任命された。任期は平成17年3月31日まで。

**人文科学研究所長**

森 時彦人文科学研究所教授（文化構成研究部門担当（中国近現代史））が、阪上 孝人文科学研究所長の任期満了に伴う後任として、4月1日付けで任命された。任期は平成17年3月31日まで。

**再生医科学研究所長**

中辻憲夫再生医科学研究所教授（再生統御学研究部門担当（発生生物学））が、山岡義生再生医科学研究所長の任期満了に伴う後任として、4月1日付けで任命された。任期は平成17年3月31日まで。

**基礎物理学研究所長**

九後太一基礎物理学研究所教授（物理基礎研究部門担当（素粒子論））が、益川敏英基礎物理学研究所長の任期満了に伴う後任として、4月1日付けで任命された。任期は平成17年3月31日まで。

**数理解析研究所長**

高橋陽一郎数理解析研究所教授（無限解析研究部門担当（確立解析））が、柏原正樹数理解析研究所長の任期満了に伴う後任として、4月1日付けで任命された。任期は平成17年3月31日まで。

**原子炉実験所長**

代谷誠治原子炉実験所教授（核エネルギー基礎部門担当（原子炉物理学））が、井上 信原子炉実験所長の任期満了に伴う後任として、4月1日付けで任命された。任期は平成17年3月31日まで。

**霊長類研究所長**

茂原信生霊長類研究所教授（進化系統研究部門担当（自然人類学））が、小嶋祥三霊長類研究所長の任期満了に伴う後任として、4月1日付けで任命された。任期は平成17年3月31日まで。

**放射線生物研究センター長**

小松賢志放射線生物研究センター教授（放射線システム生物部門担当（放射線分子生物学））が、丹羽太貫放射線生物研究センター長の任期満了に伴う後任として、4月1日付けで任命された。任期は平成17年3月31日まで。



生態学研究センター長

清水 勇生態学研究センター教授（生態学研究部門担当（分子生態学））が、山村則男生態学研究センター長の任期満了に伴う後任として、4月1日付けで任命された。任期は平成17年3月31日まで。



環境保全センター長

高月 紘環境保全センター教授（環境保全工学）が、橋本伊織環境保全センター長の任期満了に伴う後任として、4月1日付けで任命された。任期は平成17年3月31日まで。



留学生センター長

田村 武工学研究科教授（土木工学専攻地盤工学講座担当（社会基盤工学））が、鈴木健二郎留学生センター長の任期満了に伴う後任として、4月1日付けで任命された。任期は平成17年3月31日まで。



高等教育研究開発推進センター長

高等教育研究開発推進センターの新設に伴い、赤岡 功経済学研究科教授（組織経営分析専攻経営・社会環境分析講座担当（経営学原理））が、高等教育研究開発推進センター長に4月1日付けで任命された。任期は平成17年3月31日まで。



総合博物館長

山中一郎総合博物館教授（考古学）が、瀬戸口烈司総合博物館長の任期満了に伴う後任として、4月1日付けで任命された。任期は平成17年3月31日まで。



フィールド科学教育研究センター長

フィールド科学教育研究センターの新設に伴い、田中 克フィールド科学教育研究センター教授（里域生態系部門河口域生態学分野担当（海洋生物資源学））が、同センター長に4月1日付けで任命された。任期は平成17年3月31日まで。



福井謙一記念研究センター長

4月1日に新設された基礎化学研究センターは、福井謙一記念研究センターと称することになり、同センター長に森島 績工学研究科教授（分子工学専攻分子設計学講座担当（分子設計学））が、4月1日付けで任命された。任期は平成16年3月31日まで。



(再任)

附属図書館長

佐々木丞平文学研究科教授(思想文化学専攻美学・美術史学講座担当(日本近世絵画史))が、4月1日付けで附属図書館長に再任された。任期は平成17年3月31日まで。

人間・環境学研究科長・総合人間学部長

江島義道人間・環境学研究科教授(人間・環境学専攻環境情報認知論講座担当(知覚心理学))が、4月1日付けで人間・環境学研究科長に再任された。なお、同研究科長が総合人間学部長を兼ねることとなった。任期は平成17年3月31日まで。

文学研究科長・文学部長

紀平英作文学研究科教授(現代文化学専攻現代文化学講座担当(現代史学))が、4月1日付けで文学研究科長・文学部長に再任された。任期は平成16年3月31日まで。

経済学研究科長・経済学部長

下谷政弘経済学研究科教授(現代経済学専攻現代経済学講座担当(日本経済論))が、4月1日付けで経済学研究科長・経済学部長に再任された。任期は平成16年3月31日まで。

医学部附属病院長

田中紘一医学研究科教授(外科系専攻移植免疫医学講座担当(移植免疫医学))が、4月1日付けで医学部附属病院長に再任された。任期は平成17年3月31日まで。

木質科学研究所長

則元 京木質科学研究所教授(木質バイオマス研究部門担当(木質バイオマス))が、4月1日付けで木質科学研究所長に再任された。任期は平成16年3月31日まで。

経済研究所長

佐和隆光経済研究所教授(数量産業分析研究部門担当(計量経済学))が、4月1日付けで経済研究所長に再任された。任期は平成17年3月31日まで。

放射性同位元素総合センター長

五十棲泰人放射性同位元素総合センター教授(原子核及び原子物理学)が、4月1日付けで放射性同位元素総合センター長に再任された。任期は平成17年3月31日まで。

国際融合創造センター長

松重和美工学研究科教授（電子物性工学専攻機能物性工学講座担当（分子ナノエレクトロニクス））が、4月1日付けで国際融合創造センター長に再任された。任期は平成17年3月31日まで。

保健管理センター所長

川村 孝保健管理センター教授（内科学・疫学）が、4月1日付けで保健管理センター所長に再任された。任期は平成17年3月31日まで。

ウォータールー大学との学術交流

本学とカナダのウォータールー大学は、大学間学術交流協定の締結について協議を重ねてきたが、この度本学と同大学の教育・研究の交流と協力を推進するための「学術交流に関する一般的覚書」を交換した。

ウォータールー大学との「覚書」は、本学長尾真総長とウォータールー大学 David Johnson 学長および Paul Guild 副学長の署名により、平成15（2003）年1月31日に交換された。

同大学は、1957年創立の公立大学で、応用健康学部、芸術学部、工学部、環境学部、数学部、理学部の6学部、大学院は応用数学、建築学、生物科学、経済学、歴史学、哲学、物理学、社会科学、統計学、会計学等修士49専攻、博士49プログラムを有する総合大学である。学生数は22,000名、教員数は1,400名（フルタイム726名）（ウォータールー大学のホームページ <http://www.uwaterloo.ca>）

寸言

連続，非連続

堀場 雅夫



20世紀の延長線上に21世紀はないという考え方は万人の認めるところであるが、しかば何がかわるのか、何はかわらないのか、何は変えるべきなのか、何は変えてはいけないのか、ということになる

と諸説紛紛ままとまることはないのも当然のことと思う。しかし我々の結論が出ようが出まいが時は刻々と進み新世紀に入つてすでに2年が経過したが、10年先どころか3年先の予想すら見えてこないのが現状である。

私事になるが私が強く希望していた核物理の研究者の夢が1945年8月（太平洋戦争敗戦。京大理学部物理学科3回生）に破れて以来、夢とは全く異なる企業経営の道を58年間過ごしてきた結果得たものは、自分の夢とか希望はほとんどかなえられないということと同時に、全力で進んでいたらまた新しい夢や希望がわいてくるということだ。夢を失い大学を飛び出してからただがむしゃらに仕事をしたが、目指した仕事はことごとく種々の問題即ち自分自身の未熟さや全く自分では如何ともし難い外因により事業化を阻まれ、やっと事業としての未来が見えるようになったのは10年後のことであつた。

バブル崩壊後の日本はなんだか私が大学を飛び出してから10年によく似ているように思う。色々考えてやってみるがことごとく結果として失敗に終わり、今までの経験も役に立たず、少しよくなりそうに思うと外因により潰されてしまう。段々自信が無くなり、悲観論が強くなってくる。でも私が今まで生き残つたのは絶対にくじけない、世間に負けない、“never give up”の気持ちであつたと思う。

バブル後の日本は完全に非連続（カオス）の時代に入つたと思う。今や日本の体質は自分の努力だけでは簡単に改善できるような単純な状態ではないが、一方自分自身の気力が無くなり、自信を喪失すれば直ちに精気を失い転落の道をたどることは明白であ

る。

非連続の時代にいかに対応すべきか。多くの日本人は連続の時代、線形の時代しか経験の無い人が大部分だから、そのノウハウを持っていないし、もともと非連続の時代対応法といったものがあること自体おかしいことかもしれない。だからといって出たとこ勝負というのは余りにも能がなさすぎる。

冷静に考えると非連続といつてもすべてが折れ曲がっているわけではない。一番連続しているのは現在地球を支配している生物は人類であり、その人間としての本質はこの地球に人類が発生してから数百万年ほとんど変わっていない。変わっているのは知が進んで社会様式、生活様式が変わっただけである。

人間の五欲はいつの時代でも健全に存在しているし、一方倫理、道徳もまた健在であり、常にその相克に悩んでいる人間の姿は少しも変わってはいない。したがってキリストも釈迦も2000年経っても人の心のよりどころになっているのもうなずける。

さてそこで我々のあるべき姿とは、冷静な現状把握と共に自分の信念哲学に生きることと思う。何がかわつたのか、何はかわってないのかは冷静な客観的な観測により見えてくる。そして何を変えるべきなのか、何は変えてはいけないのかは自分の確固たる価値観で決断すべきである。一喜一憂、小手先対応は決してよい結果をうまない。

こうして考えていくと今こそ京都大学の先輩達が大切に育ててきた京大思想、即ち人間の生きる哲学が生きてくるのだ。軽薄なトレンドに流されず、信念を貫く人間こそ今の日本に最も望まれているのだ。

最後に皆さんに一言プレゼント。これはパソコンの生みの親、アラン・ケイの言葉である。

「未来は予想するものではない。未来は自分自身が作り出すものだ」

京大生並に京大卒業生の奮起を望む！！

（ほりば まさお（株）堀場製作所会長 昭和21年理学部卒）

随想

「一般教育」をめぐるって思うこと

名誉教授 山口 巖

京都大学を定年退職して、はや五歳を迎えている。在職中に元総長沢田敏男先生の御慫慂もあり、新設の鳥取環境大学に籍を置くことになって現在に至っている。年々若返る学生諸君と接するのは、心楽しいことではあるが、反面色々と考えさせられることも多い。以下に述べることは、ごく一般的な所懐に過ぎないことを、特に断っておきたい。



先だってさる落語家が、近年漫才が隆盛を極めつつあるのに、なぜ落語が凋落しつつあるのかを、テレビで語っていた。落語はことばによって情景を描き出すことで、人を惹き付けるものであるが、最近のことばによって情景を想像すること、あるいは一定の心象を作り出すことが難しくなっているためであろうという。

確かに漫才は見る対象が情景を構成しているために、聴くものが支払うべきエネルギーがはるかに少ない。直接的なのである。実際に若い学生に接してみても、極めて優秀な諸君がいるのはもちろんであるが、文章を書くのが苦手なものの割合が、年々着実に増えているように思われる。そして後者の場合、物事を論理的に考えることに関して明らかな相関関係にあるように感じられる。序でに言えば、最近英語力を高める必要が、各方面で叫ばれており、それはそれとして大変結構なことであるが、日本語で表現できる以上のものを、果して英語で表現できるものであろうか。疑問なしとはしない。

大学において教えることができるのは、今の時点における知識あるいは技術以上のものではあり得ない。学生がやがて扱うことになるさまざまな問題は、言うまでもなく学生自身が解決しなければならないはずである。そのとき、必要とされるのは、彼がそれまで身につけてきたあらゆる知識と柔軟なものの見方、論理の運びであるに違いない。

この力をつけるものが、一般教育であると私は考えている。それは広い知識もさることながら、既成

の概念、既成の考え方を乗越えることのできるような、思考の訓練ではないかと思われる。その意味で一般教育は単なる基礎教育であってはならないと考えるのである。

近年私の専門とする言語学の分野でも、そうしたパラダイムの変換を経験した。内容的類型学である。これは長年に亘るロシアのカフカス諸言語の研究の結果もたらされたものであるが、これらの言語は主語・述語・目的語の関係の論理的表現が多くのヨーロッパ諸言語とは異なり、別種の内容的類型（能格言語類型）を形成していることが、明らかになって来た。詳細に立入ることはしないが、このことによって例えば文には主語が必須であり、他動詞は目的語を必要とするというのは、ヨーロッパの諸言語が所属する類型（対格言語類型）にのみ固有のものに過ぎず、他動詞と自動詞の区別すらもともに行われぬ言語がかなり広範に存在することが知られてきた。

能格言語においては能動・受動の区別もなく、また一見自明であると思われてきた、例えば「太郎が次郎をたたいて逃げた」という文における「逃げた」という動詞の意味上の主語は、この種の言語では「太郎」ではなく「次郎」なのであり、しかもこの取扱いは完全にこの種の言語に内在する論理に整合しているのである。このような結論に到達するのが、およそ三世紀に垂んとする研究の過程を必要とした所以は、偏に研究者たちが、自己の有する対格類型の言語の規範を、普遍的なものだと信じて疑わなかったことによる。何れにせよこの発見によって従来の研究の再検討が進み、新たな発見と同時に、解決すべき新しい疑問が次々と現れて来つつある。

このようなことを考え合わせれば、大学において一般教育をどのように構築していくかという問題は、極めて由々しいものであると思われる。かつて教養部において一般教育に携った者として、考えねばならぬことは極めて多い。

（やまぐち いわお 元人間・環境学研究科教授，平成10年退官，専門は一般言語学，スラヴ言語学）

洛書

時空と心の距離感

中原 勝



小生は、瀬戸内海で3番目に大きい島に生まれ育ち、39年前京都大学に入学し、高度成長期の京都大学の教育を受け、30年前研究に従事する機会に恵まれた。田舎育ちの自分にとって中学時代の修学旅行以来の京都の街に着くまでに要した時間は現在の3倍を超えた。山口県の故郷の島には、今では橋が架かり、蒸気機関車の走っていた国鉄はJR西日本に変わった。のんびりとした汽笛の響きやぬくもりのあるテイルランプの色が懐かしい。交通手段の進歩で「距離感」は数倍の因子で短縮された今である。国際会議に参加するために出かけるヨーロッパ、南北アメリカへの旅も船ではなくジェット機となり、便利で速くなった。世界諸国の科学者やジャーナル等の文献はインターネットで結ばれており、旧来の航空便による速さと情報量とは比較すべくもない。産業革命は、肉体労働から人間解放に貢献したが、情報通信革命は時空の「距離感」を桁違いに短縮した。

この結果として、人間と人間との心の「距離感」はどんなに変化したか。

生物の形態進化は数世代の時間を経て行われる。小さな単細胞から如何にして高度に進化した人類が誕生したのか、不思議である。水の惑星・地球上に生命が誕生したのは数十億年も前であるが、直立二足歩行し、道具や火を操作する人類が誕生したのは数百万年前に過ぎない。7～1万年前の厳しい氷河期にも、我々の直接的先祖であるクロマニオン人等の人類は生存し続けた。寒さに耐え、食を充足し、生活を営む技術と知恵を身につけ、精霊との対話としての洞窟壁画等を残した。

21世紀を迎えた地球上の現在は、生活しやすい自然・衣食住環境にある。にもかかわらず、社会の空気、人々の心理が明るく、未来の希望に満ちているとはいえない。若者たちに未来を語ることが研究者、教育者の務めであるので、心の安らぎ、希望の不足を心配する。心の安らぎをもってこそ、未踏の

「ジャングル」への挑戦への勇気、謎に挑む心の強さが生まれる。

生物の進化が選択的であるか、中立的であるか、それは専門家に任せるとして、人の心はどのように進化・退化するのであろうか。「悪貨は良貨を駆逐する」、「朱に交われれば赤くなる」という。人間の心的状況は周囲の環境、風俗に左右されやすい。心の進化は、教育・学習・訓練によるが、高から低への風俗の流れによって心は退化する。心の退化は驚くほど短時間で起こる。自分が生きた半世紀の間にも、日本人の心は大きく変化し、素朴な人情味と忍耐力が急激に退化しつつあると感じる。個を楽しむあまりに、個と個の相互作用が乏しくなった。物質の世界では、分子も衝突し合って「熱い分子」と「冷たい分子」がエネルギーを交換し合って、安定化する。有効な衝突・相互作用である言葉の交換が人間社会にも必要である。

交通、通信の手段が発達すればするほど他者の助けのもとに生かされている人間を自覚し、他者に感謝する気持ちはうすれる。穏やかな時ばかりではないが、周囲の人は水・空気・光のように不可欠な存在であるのに……。人間を超越した存在に畏敬の念をもたずして……。これは進歩と調和の相克である。文明の利器は人類の無駄な労苦からの解放をもたらしたが、同時に必要である人間同士の直接の挨拶、ぶつかり合い、議論、主張、口論、激論を減らした。「熱い言葉」と「冷たい言葉」があつてこそ人間関係は自然であり、平和共存できるのに……。不都合なとき、「わからない」、「すみません」、「そうですね」と言えないで、ひたすら「黙る」ことは心の退化である。

ところで、科学者はお喋り好きであり、友をこよなく愛する性癖をもつ。人を導くことは難題の類だと思うが、「友と語り合う、人間同士の心の通信手段」は研究と教育に必要であり、守り伝えなければならない。心の距離感が増大することを嫌悪し、「心のエントロピー」を消散させないために。

(なかはら まさる 化学研究所教授)

訃報

このたび、^{うの こたか お}鵜子孝夫経済研究所事務長、^{おかがわなが お}岡川長郎留学生センター教授、^{とうえいりょうぞう}桐榮良三名誉教授、^{かわむらしゅんぞう}川村俊藏名誉教授、^{なか え たつ お}中江龍夫名誉教授、^{おか まさのり}岡正典名誉教授、^{ゆ あさゆきひこ}湯淺幸孫名誉教授が逝去されました。

ここに、謹んで哀悼の意を表します。

以下に各氏の略歴、業績等を紹介します。

鵜子 孝夫 経済研究所事務長



鵜子孝夫事務長は、2月8日逝去された。享年59。

同氏は、昭和36年4月大阪外国語大学事務員に採用され、同37年10月京都大学経理部に転任となり、その後、掛長を

経て、平成6年4月医学部附属病院管理課課長補佐に昇任、同9年4月施設部企画課課長補佐に配置換、

同12年4月経済研究所事務長に昇任された。

同氏は、この間、実に42年余の永きにわたり教育行政、特に国立学校の管理運営並びに環境整備の充実・発展に尽力し、直面する様々な事項に対して実直に取り組み、鋭意努力し、大学の発展に多大なる貢献をし、その職責を全うされた。

(経済研究所)

岡川 長郎 留学生センター教授



岡川長郎先生は、2月14日逝去された。享年58。

先生は、昭和43年京都大学農学部を卒業、同大学院で学ばれたあと、同大学農学部助手、講師を経て、平成5年京

都大学留学生センター教授に就任、国費留学生の予備教育を中心に、全学的な留学生教育を担当され、京都大学の国際交流に寄与された。

農学部在籍中は熱帯土壌学を専攻され、昭和47年から49年にかけてエンスヘーデにおいてオランダ国際航空探査・地球科学研究所土壌調査の航空写真応用判読一般課程を修められ、帰国後は、農学部助手として研究・教育に携われるとともに、大阪外国語大学非常勤講師として、ながく留学生に科学日本語

の教育を行ってこられた。この間、数度にわたり、フィリピンやアマゾン川流域のペルー、ブラジルに赴き、調査研究を通して熱帯土壌学の発展に寄与された。昭和60年に農学部講師(留学生専門教育教官)となられてからは、とりわけ農学部における留学生の教育や研究指導にあたられ、留学生センター教授に就任されて以降、国費留学生の予備教育などにおいて指導的役割を果たしつつ、全学的な留学生の教育・指導にも幅広く関与され、平成6年から12年にかけて国際交流委員会委員を努められ、京都大学の国際交流の一翼を担って活躍された。今後のさらなる貢献が期待されていた時期に、病に倒れられ、不帰の客となられた。

(留学生センター)

桐 榮 良 三 名誉教授



桐榮良三先生は、2月16日逝去された。享年81。

先生は、昭和18年京都帝国大学工学部化学機械学科を卒業，同大学大学院（工学部）で学ばれた後、同大学工学部

講師嘱託，京都大学工学部助教授を経て，同36年教授に就任，化学機械学科拡散系単位操作講座を担当された。昭和60年停年により退官され，京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間，昭和46年より同47年まで評議員として，同50年より同52年まで工学部長として，大学の管理運営に貢献された。

本学退官後は，昭和60年より平成元年まで富山工業高等専門学校長を務められた。

先生は，化学工学，中でも乾燥工学，吸着工学など不均質固体を対象とする研究で優れた研究業績を残され，固体乾燥理論の構築ならびに乾燥装置設計法の確立に多大の貢献をされた。昭和61年には，化学工学会学術賞ならびに国際乾燥会議学術賞を受賞された。

また，日本学術会議会員，文部省大学設置審議会専門委員，文部省工学視学委員，大学基準協会判定委員会委員長，化学工学会会長，国立高等専門学校協会副会長等の要職を歴任され，学術，教育行政に貢献された。これら一連の研究教育活動，学界活動により，平成8年11月勲二等旭日重光章を受けられた。

（大学院工学研究科）

川 村 俊 藏 名誉教授



川村俊藏先生は，2月17日逝去された。享年78。

先生は，昭和24年3月京都大学理学部動物学科を卒業，同大学大学院に学ばれた後，大阪市立大学理工学部副手，

講師，同大学理学部助教授，教授を経て，同44年3月京都大学霊長類研究所教授に就任，社会研究部門，次いで社会生態部門社会構造分野を担当された。

昭和62年停年により退官され，京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間，霊長類研究所で野外研究を推進する一方，昭和57年4月より1年間附属幸島野外観察施設長，次いで同58年より2年間同ニホンザル野外観察施設長として，その管理運営に貢献された。

本学退官後は，在職中に開拓されていたインドネシア・スマトラ自然研究計画遂行に専念された。平成2年からは西スマトラへJICA専門家として派遣されている。

先生は，まず日本の動物社会学の草分けとしてニホンザルの集団構造の解析をされた。次に，ニホンザルにおける「文化構造の研究」，「母系的順位構造の研究」などを行われ，日本の霊長類学の基礎を固め，それを世界に知らしめる役割を果たされた。また後年はインドネシアにおいて，熱帯林研究，霊長類研究を推進され，日本，インドネシアにおいて多くの後進を育てられた。

以上の業績に対して昭和44年に朝日賞，昭和63年4月に紫綬褒章を受けられた。

（霊長類研究所）

中江 龍夫 名誉教授



中江龍夫先生は、2月20日逝去された。享年90。

先生は、昭和10年京都帝国大学理学部数学科を卒業、同大学理学部副手、講師、助教授、工学部助教授を経て、同25年京都大学教養部教授に就任、数学教育を担当された。昭和47年に退官され京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、各種委員会委員長として教養部の運営にたずさわると共に、昭和44年より1年間評議員として、大学全体の管理運営にも貢献され

た。当時あたかも大学紛争の時に当たり、教養部長代理として活躍されるなど、非常な困難と苦勞を乗り越えて紛争解決、大学正常化に手腕を発揮された。

本学退官後は、昭和47年から同58年まで京都産業大学教授、学生部長、教務部長を務められた。

先生は、幾何学特に微分幾何学の研究において優れた研究業績を残され、その発展に寄与されるとともに、永年にわたって学生の数学教育に実績を上げられた。また、大学院教育も担当され、後進の育成に大きく貢献された。

(総合人間学部)

岡 正典 名誉教授



岡 正典先生は、2月23日逝去された。享年64。

先生は、昭和37年京都大学医学部医学科を卒業後、同大学医学部整形外科学教室に入局。同大学大学院で学ばれた後、ドイツ・スイスへ留学。帰国後、京都大学医学部附属病院助手、近畿大学医学部助教授を経て、昭和60年京都大学医用高分子研究センター教授に就任、その後同大学生体医療工学研究センター、そして再生医科学研究所の教授を務められた。平成13年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、平成8年より2年間、生体医療工学研究センター長及び京都大学評議員として大学の管

理運営に貢献された。

本学退官後は、京都市身体障害者リハビリテーションセンター所長を務められた。

先生は、生体材料学の分野で多大な業績を残され、なかでも人工軟骨の開発は、世界に類をみない極めて先駆的な研究として内外で高く評価された。

また日本整形外科学会、中部日本整形外科災害外科学会の評議員、日本バイオマテリアル学会、日本臨床バイオメカニクス学会の会長・理事を歴任し同会の運営・発展に貢献された。これらの研究・学会活動により平成14年度日本バイオマテリアル学会科学功績賞を受賞された。

(再生医科学研究所)

湯浅 幸孫 名誉教授



湯浅幸孫先生は、2月28日逝去された。享年85。

先生は、昭和20年京都帝国大学文学部哲学科を卒業、山口大学文理学部助教授、京都大学文学部助教授を経て、同45年同学部教授に就任、哲学哲学史第6講座（中国哲学史）を担当された。昭和56年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

本学退官後は、昭和61年から同63年まで佛教大学文学部教授を務められた。

先生は、その深い学殖と精緻な読書によって中国哲学史の広い領域にわたって優れた業績を挙げられたが、中でも社会道德や規範意識に関する考察は、余人の追隨を許さぬ高度な独創的研究として学界の公認するところとなっている。主な著書に『中国倫理思想の研究』、『近思録（訳注）』等がある。

また先生は、日本中国学会評議員を務められ、同学会の発展に尽くされた。

これら一連の功績により、平成2年11月勲三等旭日中綬章を受けられた。

（大学院文学研究科）

日誌 2003.2.1 ~ 2.28

2月3日 人権問題対策委員会
4日 評議会
" 保健衛生委員会
" 総長、職員組合との交渉
7日 運営諮問会議
17日 同和・人権問題委員会

18日 評議会
19日 国際交流委員会
25日 入学者選抜学力試験（前期日程）
（26日まで）
27日 附属図書館商議會

お知らせ

総合博物館平成15年度春季企画展を開催

平安時代、貴族の社会で日記をつける習慣が始まりました。時代が下がるにつれ、その営みは階層を越えて広がっていきます。今回の春季企画展では、『日記が開く歴史の扉 - 平安貴族から幕末奇兵隊まで - 』と題して、京都大学のコレクションを中心に、平安期から幕末までの日記の原本を展覧して、日本の日記文化の変遷を明らかにします。

また、近年、総合博物館の所蔵する平松家文書の中から、平信範の日記『兵範記』の一部が発見されました。『兵範記』は院政時代の歴史資料として価値が高く、重要文化財に指定されています。この発見は『兵範記』の欠落部分を補うもので、大きな意義を持つ発見といえます。本展示ではこの新発見の史料を初公開します。

会期は、4月23日（水）から5月25日（日）まで。月曜日・火曜日は休館。

詳しくはホームページをご覧ください。

<http://www.museum.kyoto-u.ac.jp/japanese/event/top.htm>



新発見の『兵範記』断簡 仁安2(1167)年2月

第8回エネルギー理工学研究所公開講演会 「エネルギー研究の最前線と研究・教育拠点活動」

開催日時：5月9日（金）13:00～17:00

開催場所：キャンパスプラザ京都 4階 第2講義室（京都市下京区西洞院塩小路下る）

プログラム

開会挨拶

研究所の最近の状況について

所長 吉川 潔

超短パルス高強度レーザーが拓く先端科学

エネルギー機能変換研究部門 教授 宮崎 健創

環境にやさしい核エネルギー実現への道

エネルギー機能変換研究部門 教授 香山 晃

望みどおりに働くタンパク質をつくる

～バイオエネルギーの新展開～

エネルギー利用過程研究部門 講師 森井 孝

ポスター展示

～各研究分野における最前線のエネルギー研究～

各研究分野担当教官及び大学院学生

参加費：無料

対象：大学生，高校生，一般市民

問い合わせ先：エネルギー理工学研究所

TEL 0774-38-3400

詳しくはホームページをご覧ください。

<http://www.iae.kyoto-u.ac.jp/Symposium/koukaikouen/2003/>

編集後記

本年度最後の編集部会は卒業式の翌日でした。京都大学は大きいとは思っていたのですが、2,700を超える学部生，2,000を超える修士，600を超える博士が卒業，修了，授与ということを知り，改めてその大きさに驚きました。大きな大学は確かに便利ですが，大きなことがすべて良いこととは限りません。現在の日本は大学だけでなく，企業も大きな集団になって生き残ろうとしておりますが，某銀行のように合併したがために問題が続出ということもあります。変化の激しい時は却って小さな集団の方が変化に対する対応が素早く，生き残りが可能であるとも考えられます。この大きな京都大学が明日にも生き残り，発展して行くためには，単純に世の中の流れに流されるだけでなく，未来を自分自身で作り出すことが必要で，そのためには小さな大学の何倍かの努力が必要であると考えられます。広報としては，その変化を時々刻々皆様にお知らせしていきたいと思ひます。

（中村記）